

今井亮太郎のいまをつくった すべてへのサウダージを込めて

ブラジル音楽ピアニスト／作曲家／プロデューサー
今井亮太郎さん



在りし日の今井洋一・亮太郎親子



大好きな平塚海岸にて…

例えば平塚海岸をブラジルのリオ・デ・ジャネイロにみたくてみるのはどうだろう？ワールド・カップやオリンピックを立て続けに控えた世界有数の港湾大都市。そして、サンバやボサノヴァを生んだ音楽の都としても名高いリオに、強い想いを寄せ続けている男がいる。名前は“今井亮太郎”。1979年に生まれ、今や若手では随一のブラジル音楽のピアニスト／作曲家／プロデューサーとして知られている。ブラジルで音楽を学び、

幾つかのバンド活動を経て、2011年にソロ・アルバム『湘南ーリオデジャネイロ』を発表。そして2013年1月、『ピアノ・サウダージ -featuring Izumi Akahane-』で遂にメジャー・デビューを飾った。

今井亮太郎は平塚市立夕陽ヶ丘保育園、八幡小学校、神明中学校、県立大磯高校を経て今に至る、生粋の“平塚っ子”だ。幼い頃は機関車D52が置いてある文化公園や相模川の河川敷や土手を駆け巡り、子供の頃は大好きな平塚海岸で羽を伸ばし、高校時代は大磯海岸でデートを楽しんだりもした。

彼に平塚の魅力を尋ねると「海を感じるゆるやかな雰囲気と、そこに住む職人気質で熱いゴキゲンな人々たち」なのだ。大きな海岸と大きな街…平塚とリオの人々の気質にはどこか共通点があってもおかしくはない。そんな彼がいつしか深く傾倒して行ったのがブラジル音楽だ。たまたま家にあったブラジル音楽集のレコードになぜか強く惹かれ、いつしかブラジル音楽の虜となり、中学～高校～大学と歳を重ねるうちに本格的なブラジル音楽のソロ・ピアニスト／プロデューサーとして世に出て行く決意を固める。



ファミリーとも言える素晴らしい音楽仲間たちとともに

温厚で優しい父にそのことを告白すると、とても厳しい顔と口調で彼に言った。「生半可な道じゃない。もし少しでも手を抜くことがあるなら、即やめさせる。それはしっかり心に入れておけ。それから目に見える結果を常に持ってきなさい。プロフェッショナルは経過ではなく、結果が全てだから。」と。

彼の父・今井洋一さんは、小学校の教諭から、平塚市の教育委員会を経て、金田小学校や花水小学校などの校長を歴任された(アルバム『湘南ーリオデジャネイロ』のジャケット写真は花水小学校の校庭で撮影された)。実は洋一さんは、つい先日の2013年1月12日、心不全で急逝、62歳の生涯を閉じられた。教育への情熱と生き様で、沢山の人の生き方に大きな影響を与えてきたとても立派な人だった。

今井亮太郎自身も、父と、そしてさらに早くに亡くなっている母から大きな影響を受けている。愛する父が亡くなった4日後の1月16日に、ニュー・アルバム発売記念ライブが東京・渋谷JZ Bratで行われた。肉体的にも精神的にも限界に近い状況の中、素晴らしい仲間たちにガッチリと支えられて、3時間半を越す最高のライブをやり切った。



生涯ーピアニストを決意している

そのライブでは大半の曲がニュー・アルバム『ピアノ・サウダージ』から演奏された。生まれ育った湘南とリオに共通する青い海、そして幼い頃に連れられて行った山々の抜けるような青空を想起させる、爽やかでどこかメロウな雰囲気彩られたこのアルバムについて、彼はこう語っている。「今の自分を創っている様々なルーツにスポットを当て、その散らばった瑞々しい記憶たちを、ブラジルピアノという僕のアイデンティティでまとめて、自分の原点からの音を世界に向けて発信したい」と。「ピアノでブラジル音楽を奏でる」のは彼のアイデンティティ。ピアノとブラジル音楽を一点に結んだ時に、彼は最高に自由になれるのだという。大きな翼で空も飛べるし海にも行ける。楽しくも哀しくも、笑うことも泣くことも、踊ることもできる。そんな今井亮太郎の世界を作っているルーツ、そしてサウダージにスポットを当てた今作。

平塚が生んだブラジル音楽専門のピアニスト、今井亮太郎の音楽のルーツ、歩んで来た道、そして瑞々しいサウダージをいっぱい込めた『ピアノ・サウダージ -featuring Izumi Akahane-』で、ぜひ今井亮太郎の世界観を体験して欲しい…。

(文：早川隆浩)

今井亮太郎 NEW ALBUM
『ピアノ・サウダージ
-featuring Izumi Akahane-』
好評発売中
(2013/01/09 Release)
OMCA-1163 ¥2,500税込
【オーマゴトキ/コムピア・マーケティング】



※サウダージ：ポルトガル語で切なさ、郷愁、憧憬など
表紙写真 撮影場所:JZ brat Sound of Tokyo 写真:平野敬子 (KEI+kay)